批判的実在論と“社会”概念［2］
―社会学における間-専門性へと関わらせて―

木田　融男[i]

社会科学における「社会」と社会学における“社会”とがあるが，後者の“社会”を「経済」,「政治」に対置する（中義の）“社会”概念であると定義してきた。その“社会”概念の内実は，批判的実在論におけるバスカーの「四面的社会存在4PSB」から引照しうるのか，しうるとすればそれは何かというのが本稿の第一の課題である。4PSBは彼の「社会活動の転態モデルTMSA」を展開させたものであり，人間の成層的な行為者性を基軸として，自然との関係性を背景に，一方で間-／内-主観（人格）関係，他方で社会関係／構造という視点は，バスカーが言う「具体的普遍」をもつ「社会」の把握であるが，“社会”（そして社会学）の内実としての可能性を秘めている。しかし人間（行為者性）と社会（構造）の「二重性」という基本前提をこの視点はもち，二つの成層を学問対象とする社会学は,「一つ」の専門性としていかに存立するのか，という課題を抱える。私は，バスカーの「薄層」という捉え方，すなわち人間（成層）と社会（成層）との間における創発的複合性としての薄層を“社会”とし，したがって学問的には間-専門性（学際性）inter-disciplinarityという捉え方，すなわち人間科学と社会科学との間における創発的複合性としての薄層を社会学とするという説明をしているが，この提示が第二の課題であろう。

キーワード：“社会”概念，形態転換，四面的社会存在，行為者性，間-／内-主観（人格）的関係，薄層，間-専門性

はじめに
1　“社会”概念をテーマにすること
(1)「社会」諸概念
(2)“社会”概念の問題とCR論の成層性／創発性
(3)“社会”概念への前提
①　マルクス『資本論』の方法に内在する“社会”概念の潜在性
②　「混沌とした表象」における“社会”への前提
2　批判的実在論の四面的社会存在（社会的立方体）
(1) コリアーの薄層化構造体
(2) バスカーの四面的社会存在（社会的立方体）
①　四面的社会存在4PSB
②　4PSBの各平面：(a) 面，(b) 面，(c) 面，(d) 面
③　4PSBの下位次元
④　4PSBと成層
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～以上，［1］前半
(3) 四面的社会存在へのコメント
①　4PSBの構成
②　TMSAがもつ人間と社会の二重性
③　4PSBと「社会」
3　薄層／間-専門性（学際性）と社会学
(1) バスカーの「社会」／社会学
①　バスカーの社会学
②　他の社会諸科学
③　バスカーの「社会」／社会学へのコメント
(2) 薄層と間-専門性
①　成層と薄層
②　バスカーの間-専門性における薄層
(3) 薄層と社会学／間-専門性

i　立命館大学名誉教授

4　批判的実在論と“社会”概念／社会学
（1）二重性の問題
（2）社会的諸構造（経済－社会－政治）の問題
（3）“社会”における多くの規定と関係
～～～～～～～～～～～～～～～～～～以上［2］後半

文中の略記説明
CR = Critical Realism 批判的実在論
4PSB = Four-Planar Social Being 四面的社会存在
SC = Social Cube 社会的立方体
TMSA = Transformational Model of Social Activity 社会活動の転態（形態転換）モデル
MMC = Marx's Method of Capital マルクスの資本論の方法

（２　批判的実在論の四面的社会存在（社会的立方体）のつづき）

(3) 四面的社会存在へのコメント

① 4PSB の構成

構造（あるいは成層）や，また諸構造（あるいは諸成層）の集合としての構造体として描くのではなく，成層を含む水準 level，次元 dimension，そして時には薄層 lamination（後に考察）をも入れた複合体として四面的社会存在 Four-Planar Social Being（4PSB）（社会的立方体 Social Cube（SC））は構成されている[14)]。バスカーによれば具体的普遍性に，すなわちそれぞれの具体的概念が，普遍的ではあるが特殊性を纏った個別的なものに，できる限り表出されるべきだという意図のゆえに，4PSB については理解が困難なところが多い。ただ人間的実践という行為者性 agency を基軸において，自然との関係，社会的諸構造との関係，行為諸主体 agents 間の社会的諸相互作用との関係，そして身体化した成層としての人格自身との関係から，まさに十全な関係性を内含させたいという試みであることは理解できる。だが具体的局面で 4PSB の構成を見ても，コリアー的な構造体としての社会のように，経済，政治，イデオロギーという諸構造（あるいは諸成層）間の単純な集合的関係ではないという意図はわかるものの，バスカー的な四面それぞれや，構造（あるいは成層），水準，次元，さらには薄層などの関連性などについてはわかりづらい。本稿ではさらに論述課題に必要な検討を加えていきたい。

② TMSA がもつ人間と社会の二重性

4PSB は，行為者性を中心軸としながらも，(a) 面では自然的世界との関係性で捉えること，また（d）面（前半の図－２－(3）における，（d）社会的相互作用の（d）面は（b）面へ訂正）では人間（行為者性）を「身体化された人格」という形で自然的世界の一環性として捉えること，および「人格の成層化」という成層論的な捉え方をしていること，などは社会的存在 social being を見るバスカー CR 論の視野の広さを物語っている。前述したように社会活動の転態（形態転換）モデル Transformational Model of Social Activity（TMSA）の発展としての 4PSB そのものも確かに広がりを持っており，（b）面から（c）面へと，行為者性における諸主観性あるいは諸人格の社会的諸相互作用が，間 inter-/ 内 intra- の関係性で捉えられ，さらには人間的諸関係―社会的諸関係―社会的諸構造―具体的諸制度へと展開する様態については，人間（行為者性）と社会（構造）とのダイナミズムや意味的理解／解釈などへの方法論的深まりを見せてはいる。しかしながら，人間と社会との社会的諸相互作用という成層論的な「二重性 duality」の性格に基づく捉え方は，その積極性とともに「問題性」も内含している。すなわち，こういった 4PSB を例えば社会学という専門性において考察するときには，ともすれば人間と社会との「関連性」をどのように考えてよいのか，という課題にぶつかるのである。「階梯としての成層」では確かに二つの成層であるし，それら相互の作用についてはそれぞれの必要条件，限界条件という形で連動しつつも，創発性という二成層の相違性を重視しなければいけないということであろう。その面を確認しつつも，実在性としての対象が理論化されさらには現実の学問の世界において専門性にぶつかったとき，異なる成層という対象を有する理論／専門という学問的把捉については，とりわけ“社会”の対象が人

間と社会の二成層であり，社会学が「社会科学」と「人文科学」に分岐されてしまう，という現実がそうなのであるが，さらに発展した「成層論的視点」をCR論では持たねばならないということであろう。この問題は，バスカーのCR論では複合的な多重性から，「薄層」そして「間-専門性」という解決法を示すのでは，と考えられるのであり次章であらためて検討をする。

③ 4PSBと「社会」

4PSBへのコメントの最後に，本稿のメインテーマである社会科学の「社会」および社会学の“社会”との関連で，四面的社会存在4PSB（社会的立方体SC）を見ていこう。

まずは，バスカー自身が「社会」に関しては，(b) 面から（c）面への過程におけるその形成を扱っている（SR & HE, 1986, p.128）。行為諸主体の間での諸相互作用が行われ，人間的諸相互作用が社会的諸相互作用へと変化する。ここの経過については，バスカーは時に（b）面のネイミングを微妙に変えて，相互作用の姿態を何とか捉えようと苦労している。すなわち，拙稿では「社会的諸相互作用 social interactions」を（b）面のネイミングと確定したが，表-2（cf. 前半）にあるように「間-／内-主観的（人格的）諸関係 inter-/intra-subjective（personal）relations」あるいは相互作用の主体を「諸人間間 between humans」や「行為諸主体間 between agents」とバスカーは変えている。間 inter- 主観とは，主観同士の相互依存，相互媒介，相互条件などのやりとりを経て間-主観性などの「客観化」を形成するが，内 intra- 主観とは，主観同士が存在の構成作用，浸透作用，因果作用を経て内-主観性へと変化する（Dlc, 1993, p.199（式部訳, p.311））。さらに主観性を有する人格，人間，行為諸主体 agents が，間-／内-相互作用を行うという記述は，まだ関係性なり構造性を形成しない，相互作用の様相に関していかに具体性を持ちつつ普遍的に語るのか，というバスカーの工夫であろうか。そのように描かれた（b）面は，社会的諸相互作用が「人間的諸関係」さらには「社会的諸関係」へと変化し，最終的には（c）面である「社会的諸構造」を形成することとなる。今度は行為者性を媒介として（c）面あるいは（a）面との相互作用をしつつ，時間的／空間的な拡がりから地史（誌）的に構成していくならばやがてそれはバスカーの言う「社会」の出現となろう。

ここで（c）面の社会的諸構造（あるいはその具体的諸制度）を「社会」とバスカーは表現しているのではあるが（SR & HE, 1986, p.130, Diagram 2.10），しかしながら「社会」としてバスカーは別の三パターンを提示している。（ⅰ）社会的諸形態 social forms，次に狭く（ⅱ）社会的諸構造もしくは生成諸メカニズム，さらにより狭く（ⅲ）その中で実践が生起させる人間的諸関係というものだ（ibid, p.129）。今までに述べた（c）面の社会的諸構造は，これら三つのうちの（ⅱ）にあたり，私の前半論文で整理した「社会」概念の類型論では「（広義の）社会」といえ，また（d）面の社会的諸相互作用（あるいは間-／内-主観的（人格的）諸関係）は，三パターンの中の（ⅲ）にあたり，その類型論だと「（狭義の）社会 sozial」といえようか。そうすると（ⅰ）社会的諸形態は「（最広義の）社会」ということとなり4PSBにはどう対応するのだろうか。社会的諸形態 social forms ということでは，「形態転換（転態）transformation」における（社会）形態（social）formation ならば，マルクスの「（最広義の）社会」である社会構成（体）social formation と英語では同じこととなるのだが，同じ対象あるいは同じ意味なのかどうかはわからない。また形態転換（転態）ということでは，人間と社会の両方の転換を意味するわけであるから，バスカーの（ⅰ）社会的諸形態は，この両方を指すのかもしれない。そしてTMSAは，4PSBへと発展したのであるから，4PSBそのものと呼応するのかもしれない。もしもそうだとするならば，社会科学の「社会」とは，（ⅰ）の社会諸形態である4PSBなのか，（ⅰ）の4PSBの（c）面である社会的諸構造なのかどうか，が問題となる。しかし人間である行為主体や行為者性を対象に入れた4PSBよりは，入れ

ていない（c）面である社会諸構造の方が，既存の社会科学における「社会」に近いと思われる。また（iii）の人間的諸関係は，（b）面の社会的諸相互作用と対応するのであろうが，社会学の“社会”なのかと問われれば，否と答えなければならない。なぜならこの（b）面とは，行為諸主体そのものは人間的成層であり，それ自体は生成メカニズムを当然のこと有するのだが，行為諸主体の相互作用という構造形成へと向かう「過程」的存在であっても，生成メカニズムである構造ではない。したがって（b）面の社会的諸相互作用は，科学の成立を保証する構造／生成メカニズムをもたないし，そうであるから創発性をもたない，すなわち成層ではないということである。したがって社会科学の中の一員としての専門学問である社会学の対象として，（b）面は“社会”とはならない（もちろん「（狭義の）社会 sozial」である可能性はあるが）。

そうならば社会学の“社会”とは何と考えればよいのだろうか。社会科学の「社会」が（ii）／（c）面であり，（iii）／（b）面が“社会”でないとすると，（i）／4PSB が，“社会”なのか。

留保付きではあるが，私は「そうだ」と考えたい。留保とは，上記した 4PSB の「二重性」すなわち「人間と社会」という成層論的分岐を，科学として整合的に把捉できるのかという問題をどう解くかなのであるが，これも次章で考察をしたい。

3　薄層／間-専門性（学際性）と社会学

(1) バスカーの「社会」／社会学

①バスカーの社会学

バスカーは，「関係主義的」社会認識を提示し，マルクスの「社会は諸個人（や諸集団）の集まりではなく，それらの人々が置かれた様々な諸関係の総体である」（PN，1979，p.26（式部訳，p.30））[15] という関係論を基にしたものだとする。彼の理論展開の軸は，「社会的行為主体の経験を通じて概念化された社会生活の表層的諸現象から，そうした現象を引き起こす基底的な社会関係へと推移していくことにある」とする科学認識であり（ibid.），そういった社会関係の学として社会学があるとする。

すなわち，社会学の本来の対象とは，「諸個人（そして諸集団）間に持続的に成立している諸関係」であり（ibid. pp.28-9（訳，p.33）），また社会学の主題とは，関係と関係との相互連関であり，そこにおける関係性は，内在的（必然的）なものであり，全体性カテゴリーで表現されるとして，「社会は個々の人間に先立って存在し，人間活動の前提条件であるが，…逆に人間活動の働きかけのないところに社会は存立しない」とする，前述した人間（行為主体）と社会（構造）との関連性を提示するのである（ibid.）。

②他の社会諸科学

そのように定められた社会学と他の社会諸科学とは，バスカーによればいかなる関連をもつのだろうか。特定の歴史的文脈において，特定の社会形態が再生産／転態される際に欠かせない，諸々の関係性を支配する構造に関心を向ける社会学は，他の社会諸科学と歴史学の双方を前提に成り立つとし，その一方の歴史学とは，「過去の特殊者」に関する科学であり，もう一方である他の社会諸科学とは，特定タイプの社会活動の構造的条件（社会活動の生成構造の仕組み）を捉える科学とする。

③バスカーの「社会」／社会学へのコメント

ここで紹介するバスカーの社会学および他の社会諸科学／歴史学との関連についての考えは，四面的社会存在 4PSB 論に基づくものではないが，しかし関係主義的社会認識という点では共通であろう。したがって，関係性とその構造について言うならば，それを対象にするのは社会学に限られるものではなく，社会諸科学／歴史学など全体に共通の認識であると考える。したがって社会学が「一般的な関係性」を対象とし，他の社会諸科学／歴史学が「具体的な関係性」を対象とする対置させる視点については，かつて種々の「社会学主義」の誤謬を経験している社会学界にとって承服はできないだろう。すな

わち，社会学にも独自な「具体的な関係性」という特殊領域の対象もある一方で，当然ながら他の社会諸科学と同じく「一般的な関係性」も保有するという，「社会諸科学」の一専門分野としての社会学と考えるのが妥当であろう。

そうすれば，バスカーが展開した4PSBについて見るならば，「社会」と社会諸科学，そしてその一つである“社会”と社会学とはどう描かれるのかを見なければいけないが，バスカーには4PSBとの関連で社会諸科学や社会学については書かれていないので推察を加える他はない。ただし，学問の各専門分野や学際性などを語るには，彼の後年に展開されたバスカーによる「薄層」や「専門性／間-専門性（学際性）」も考察しておく必要があるだろう。

(2) 薄層と間-専門性

①成層と薄層

2章の（1）（cf. 前半）で述べたように，CR論の大きな特徴に成層stratification（階層stratum）論的な捉え方があるが，そこには「ドメインdomainとしての成層」論と「階梯hierarchyとしての成層」論とがあった。さらに，後者の成層論から，コリアーは（広義の）成層を構造体structuratumとして，その中に複数の構造があり水平的な創発性を生成している場合，その複数の構造であるそれぞれの（狭義の）成層を「薄層（『弁証法Dlc』の日本語訳では積層）lamination」とよび，「階梯としての成層」とは区別を行った（そのような構造体を「薄層構造体laminated structuratum」と呼んだのである。Collier，1989，p.103，Dlc，1993，p.130（式部訳，pp.214-5））。バスカーはコリアーの考え方の問題点を指摘しながらも，後に別個の展開をさせ彼なりの薄層論を展開し，その考え方を学問の諸専門性を超える「間-専門性inter-disciplinarity（学際性）」の課題に適用させたのだが，社会学を考察するのに有効と思われるので検討しておきたい（ICC，2010，IWB，2018，Price et.al.（eds.），2016）。

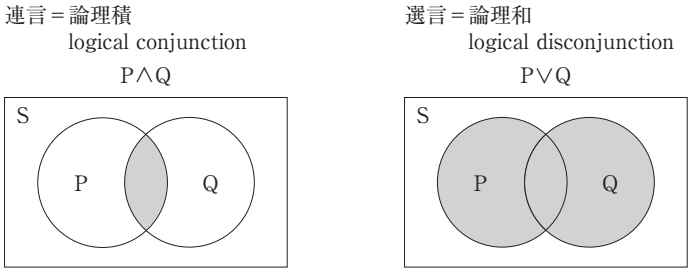
②バスカーの間-専門性における薄層

A　専門（学問）とその協働

まずは，バスカーにおける学問の専門性disciplinarityの捉え方を見ておこう。ある研究対象が成層である場合，その対象を成り立たせている生成メカニズム（構造あるいは関係）をリトロダクション（遡及）retroductionして発見するか，先行研究の軌範的言明からリトロディクション（遡源）retrodictionしたものを応用するかして解明していくのが探究や調査の作業である研究であるとした。そして一定の対象に関する「理論化」が行われ，それが集積されていく過程でその対象と理論に関する一定の分野が学問として成立するならば，そこが研究対象の一定の分野を扱う学問の専門性disciplinarityとなる（IWB,Introduction）。教育機関（大学等）では，その専門分野の分布に応じて「学部―学科―専攻―学系・・等」が設置されてきた。

さて，バスカーの言う「階梯としての成層」が対象を例えば物理領域とするならば，研究がその対象を物理理論として理論化し，種々の理論の集積はやがて物理学という専門性を成立させるとする（そして化学などと集合し学部，例えば理学部を構成していった）。こういった単一の成層を理論化して単一の物理学という専門discipline（以下，disc.）を成立させれば，それが「単-専門mono-disc.」である。

さて，CR論では自然的世界であれ社会的世界であれ，そこに存在する対象は開放システムopen systemとして捉えるから（自然的世界なら人間の手による「実験」が閉鎖システムclosed systemを人工的に作成できるが，社会的世界は「実験」ができないので開放システムのみである），その対象は複雑な複合体complexの姿をとる。すなわちそれを構成する多くの生成メカニズムをもつ諸構造から成り立つことから，多くの諸成層の複合体だということになる。そうであれば，普通の研究であっても対象は複合体であり，多くの成層の集まりであるから，単-専門のみでは研究は成り立たず，複数の諸単-専門による研究が必要となる。すなわち，多くの諸単-



図－４　連言と選言

専門による協働である「多重 multiple-／多数 plural-専門 disc.」が，開放システムにおいては複合体である対象がもつ諸生成メカニズムを協働的に研究することとなる（例えば物理学と化学と生物学の協働という風に）。研究途上では多重-／多数-専門（以下，多-専門）は，対象ゆえか方法ゆえか相互に接触し，重なり合うこととなり，「交（差）-専門 cross-disc.」を経験していくこととなるし，複合体の対象の研究ならば必ず経験する当該課題に，それぞれの単-専門の研究者は遭遇するのである（ibid. k.1313）。

B　複合体のタイプ：連言的多重性と選言的多数性

ここで開放システムにおける複雑な複合体 complex という用語や，また多重的 multiple あるいは多数的 plural という言葉を使用してきたので，少し複合体に関するバスカーの概念整理を見ておこう。バスカーは論理学用語を援用して，「論理積（連言）logical conjunction，P∧Q，P かつ and Q，P そして Q」にあたる「連言的多重性 conjunctive multiplicity」と，「論理和（選言）logical disconjunction，P∨Q，P または or Q」にあたる「選言的多数性 disconjunctive plurality」という複合体のタイプ分けをしている（cf. 図－４）。前者はそのまま訳せば「複合的多重性」であり，複数の諸要素（例，諸単-専門）が，相互に重なり合い相互に作用し合う姿を示しており，多重的な複合性 multiple conjunction は，その重なり合いや相互作用が何らかの反応を示し，創発性 emergency を生起させ，「新たな」姿をもつ対象を生成させることとなる（例，複数の諸単-専門の化学反応）。対して後者は「非複合的多数性」であり，複数の諸要素は，ただバラバラで重なり合わないし，相互に作用もし合わないので，単なる多数的 plural な諸要素の複合し合わない姿 disconjunction を示すのみである（例，元の各単-専門のまま）。ただし，バスカーはこの複合体が，対象の生成メカニズム（深層の実在的ドメイン）で複合的 conjunctive なのか，対象のできごと（事象，すなわち経験的／現実的ドメイン）で複合的なのかによって異なる概念を使う。生成メカニズムで連言的多重性（複合的多重性）であれば，それをシステム system（例，後述の薄層システム）と呼び，生成メカニズムではバラバラな選言的多数性（非複合的多数性）であっても，できごと（事象のドメイン）で連言的多重性になれば，それをネクサス nexus と呼んでいる（ibid. k.1392）[16)]。さて，ここでは多くの諸成層（諸専門）が連言的（複合的）多重性というシステムになった場合の，薄層（間-専門）の問題に戻ろう。

C　薄層と間-専門／内-専門

単-専門 mono-disc. が，複数の協働で共同研究を行う多-専門 multiple-/plural-disc. には，対象がもつ複合体の解明のため，交-専門 cross-disc. の必要性が起こる。単-専門の研究対象は CR 論でいう生成メカニズムをもった「階梯としての成層」なのであるが，自然的世界であれ社会的世界であれ，そこでの対象とは実は開放システムなので複雑な複合体 complex であり，成層の多重／多数な集合体なのであるから，その科学的把捉の理論そしてそれを基に

する専門は，普通は多-専門性が必然なのである。また複数の複合体といっても，単なる多数がばらばらな選言的（非複合的）多数性 disconjunctive plurality の状態であるわけではなく，重なり合い相互作用をする連言的（複合的）多重性 conjunctive multiplicity の状態にあり，重なった部分は多くの場合は創発性 emergency を生起し，元の成層とは異なる「新たな」特性を帯びると考えられる。この状態は，実際の複合体としての対象の複合性を全面的に把捉はできないとしても，科学と学問の発達段階に規定されながらも，部分的な複合的成層を理論化し，専門化することは可能であろう。それが専門間の「学際性」と呼ばれる営為であるが，複数の諸単-専門が多-専門となり交-専門しながら，単なるそれぞれの単-専門を生かした協働で研究成果を上げていく場合（選言的多数性）だけではなく，各単-専門が，協働して対象の複合性を科学的に把捉する営為の過程で，それぞれの専門が重なり合い，相互に依存したり，媒介したり，依存されたり，という相互作用を行う過程において，各々の単-専門の重なり合った部分が「化学反応」に似た現象を起こし，CR 論でいう創発状態を発生させる場面が現出する時もあろう（連言的多重性）。ここでの「複合的で多重的に重なり合った部分」，すなわち元の対象である成層が複合的に重なり合っているのであるが，それが理論化され専門化されたならば各専門の間の「重なる部分（前述の論理積）」となり，バスカーは成層間のこの重なる層を「薄層 lamination」と呼び（重なる部分の全体は「薄層システム laminated system」となる），それに対して諸専門間の「重なる部分」を間-専門性（学際性）inter-disciplinarity と呼び，そういった学問は間-専門 inter-disc. となる（ibid. k.1313f.）。さらには，「重なる部分」の元の単-専門における「重なりに対応する部分」にも「化学反応」が起こり創発性を帯びるならば，それぞれ元の専門内部で「新しい」変化を生起させたりする場合を，内-専門 intra-disc. と呼んでいる（ibid. k.1329）[17]。最後に，間-専門が学問として体系化され，独立した分野を構成するようになればそれは超-専門 trans-disc. となろう（ibid. k.1334）。バスカーらが関与した，そういった学問の間-専門としての薄層（あるいは薄層システム）の事例を表-3 で例示しておこう。

(3) 薄層と社会学／間-専門性

CR 論あるいはバスカーの TMSA から 4PSB 論，さらには今見てきた薄層そして間-専門性という捉え方は，本稿のテーマである「社会」と“社会”そして社会諸科学と“社会学”の見方にどういう視点をもたらすのかであるが，その前に一つ大きな問題点をクリアしておく必要があろう。すなわち，バスカーは，社会成層（専門としては社会諸科学）と人間成層（同じく人間諸科学）とを，別個の階層として存在論的には「二重性 duality」と捉える。この視点は，社会学のデュルケーム（社会＝集合から捉える），ウエーバー（人間＝個人から捉える），バーガー／ギデンズ（人間と社会との融合性から捉える）らの視点への批判では有効であるが，人間（行為者性）と社会（構造）という「二重的」分岐論から，両者の全体的（総合的）捉え方をどう考えればいいのだろうか。この両者を社会学では，切り離せないのは言うまでもないのであるが，かといってバーガー／ギデンズらの両者の融合論になってしまえば，バスカーやアーチャーらの CR 論による批判の有効性が失われる。では成層論的には二重的でありながらも，二つの分離した「対象」を社会学は分岐させたままで「一つの」専門として存在するのだろうか。他の社会諸科学（経済・経営，法・政治などの学）はどちらかといえば，人間というよりは社会（あるいは構造）を主たる対象としている専門であっていいし，人間・文化を対象とするいわゆる人文諸科学は，社会（構造）というよりは人間（行為者性）を対象とする専門であっていいだろう。ただし，社会学は，最初に紹介したように未だに社会諸科学と人文諸科学の両方に居所を持つ。そして人間の行為（行為者性）を問題にしない社会学はありえないし，逆に社会のない社会学もありえない。専門性として

表-３　薄層／間-専門性の事例

• 薄層システムの構成（Bhaskar et.al. eds.，2010，p.5）
1 下位的-個人的心理学的レヴェル
2 個人的もしくは生活誌的レヴェル
3 例えば，エスノメソドロジーや他の専門により研究されるミクロ-レヴェル
4 資本家と労働者，もしくはMP（英：下院議員，米：軍隊警察）と市民のような機能的役割間の関係性内部で考えられるメゾ-レヴェル
5 ノルウエイ経済のような全体社会やその中の地域の機能を理解しようと思考するマクロ-レヴェル
6 全体的伝統や文明の分析というメガ-レヴェル，および
7 全体として太陽系（もしくは宇宙）と考えられる太陽系の（宇宙の）レヴェル

• 間-専門性のガイドとなる７薄層の基準（Price & Lotz-Sisitka，2016，pp.9-10）
1 太陽系的（もしくは宇宙論的）レヴェル
2 南アフリカが歩んだような全伝統的で全文明的な分析のメガーレヴェル
3 イギリス経済のような全社会とその領土の役割を理解しようとするマクロレヴェル
4 支配-被支配関係のような社会学で研究されるメゾレヴェル
5 エスノメソロジーその他で研究されるミクロレヴェル
6 実存主義その他で研究される個人的，生活誌的レヴェル
7 心理学や心理分析で研究される心理学的レヴェル

• Bhaskar & Danamark（2006）の障害研究の専門内部での現象を理解するのに必要な薄層や諸層の「相互作用化，合体化」（IWB，2018，kindle 1381）
1 生物的，とりわけて生理的，医学的，臨床的メカニズム
2 心理的メカニズム
3 身体的メカニズム
4 心理-社会的メカニズム
5 文化的メカニズム
6 社会-経済的メカニズム
7 規範的メカニズム

• 教育の専門内部での現象を理解するため発展された「関係的，薄層的，創発的」CR論モデルで，Bhaskar & Danamark（2006）による障害研究のための平等モデルに触発されたもの（Brown，2009，p.23）
1 生物的メカニズム
2 身体的メカニズム
3 心理的メカニズム
4 社会-文化的メカニズム（道徳的，政治的を含む）
5 規範的メカニズム

• 薄層システムの図解（Parkar，2010，p.209）
1 宇宙論システム
2 生活支援システム
3 人間物質システム
4 人間社会システム
5 人間文化システム

• 薄層システム：南アフリカ共和国の女性に対する暴力の説明に適用された７薄層（Price，2014，pp.52-76）
1 トラウマ的な幼少期の経験
2 貧困，機会の欠如
3 抑圧的な「対面」やりとり
4 家父長制的，暴力的文化
5 社会の不平等
6 植民地主義とアパルトヘイト
7 不平等のグローバルパターン

社会学の「二重的」問題をどう解決するのか。この前提を先にクリアしないでは，バスカーらCR論とりわけ4PSB論を経た“社会”や社会学への探究はそこで停止してしまうだろう。

私見として，この問題点についてはバスカー自身の考え方である薄層と間-専門性（学際性）の視点を用いて解決させておきたい。すなわち，人間（行為者性：専門としての人間諸科学）と社会（構造：専門としての社会諸科学）という両成層（両専門）の，連言的（複合的）多重性conjunctive multiplicityの重なり，およびそこから創発性emergenceにより生成した薄層lamination（薄層システムlaminated system）と間-専門性inter-disciplinarityとしての社会学という風に考えられるのではないか，と提唱しておきたい（cf. 木田，2018）。ゆえに成層では人間（行為者性：人間諸科学）と社会（構造：社会諸科学）との二重性を基本的にもちながらも，両成層（専門）の複合conjunctionによる創発性から生成した間-専門inter-disc.（さらには超-専門trans-disc.）として，「一つの専門」化した学問が社会学であるといえるのではないか。ちなみにこのような間-専門性という学際的な社会学の性格を特徴的に有している学部，すなわち学問の協働性や総合性を「社会学を中心」に構成しようとする教学理念を持った我が産業社会学部は，まさしくその精神を具現化しようとして設置されたのではあるまいか。

4　批判的実在論と“社会”概念／社会学

結論として私見による（中義の）“社会”は，バスカーの4PSB（すなわち（b）面もしくは（c）面だけではなく，（a）面から（d）面の全四面を含む）にゆるやかに対応すると考える。したがってバスカーの三つの「社会」の中で，（ⅱ）「社会的諸構造」である（c）面，もしくは（ⅲ）「人間的諸関係」すなわち行為主体（人格）の「社会的諸相互作用」である（b）面だけではなく，（ⅰ）「社会形態」である4PSBを，人間（行為者性）と社会（構造）との複合である薄層としての“社会”に全てではないものの，およそ対応するのではないかと捉えておきたい。ただし，若干の留保をつけておかねばならないと考え，最後に以下の留意点を示しておきたい。

(1) 二重性の問題

まずはTMSAの発展形態が4PSBであるので，人間（行為者性）と社会（構造）の二重性すなわち，二つの成層の分岐を基軸とした4PSBを“社会”とすれば，２成層に分岐した専門分野が社会学となる。しかし，その「矛盾」はバスカーの薄層論により，対象としての二つの成層の連言的（複合的）多重性である薄層として，間-専門性を“社会”と考えれば解決されるだろう。ちなみに，社会的諸構造は4PSBにおいては，一つの次元である（c）面であり，（最広義の）「社会」として社会科学の相面なのだが（中義の）“社会”である4PSBよりは「小さい」，これは社会学が，二つの成層の複合であり新たな薄層としての間-専門性であることから，すなわち社会（構造）の学としての社会科学と人間（行為者性）の学としての人文科学の双方の多重的な複合性による両者の重なりによる性格からくるものと考えれば問題ないのである。さらに4PSBにおける（a）面すなわち行為者性と自然的世界との相互作用，また（d）面すなわち行為者性と身体化された人格の成層との相互作用についても，一方で自然的世界と行為者性との相互作用は行為諸主体agents相互の「社会的」相互作用を含み，また他方で人間的世界と行為者性agencyそれ自体との相互作用でありながらも，やはり行為諸主体の「社会的」相互作用を含むがゆえに，それぞれ“社会”的対象に内含されていると考えるのである。

(2) 社会的諸構造（経済―社会―政治）の問題

次に“社会”（4PSB）と「経済（資本論の世界）」と，さらには「政治（国家）」との関連性は，いかなる照応をするのだろうか。まず前提として何も概念化して捉えてない目の前にある対象はマルクスが

『要綱』で表す「混沌とした表象」としての「人口」であって，言うまでもなく“社会”とか4PSBの概念を通して見る対象が先行してそこにあるわけではない。その「表象」はマルクスにはとりあえず漠とした「経済的，社会的sozial，政治的，精神的」生活過程と映り，生活の必要条件すなわち「経済＝物質的生活の生産様式」という物質的な自然的世界に一番近い生活過程を下向の開始とし，つづいて後に「資本論の世界」と概念化される生活に必要な条件を作り出す「経済」的世界を，下向（分析）／上向（綜合）し（CR論ではリトロダクション（遡及）とリトロディクション（遡源）[18]），一定の商品から貨幣，資本，そして資本の生産過程から流通過程，それらの総過程までを叙述するのだが，残念ながらこの世界の上向は中途で終わっている。“社会”まで辿り着いてはいないので，上向の終着点としての「豊かな全体性」である4PSB（すなわち“社会”）との間の過程は推量するしかない。

4PSBでは，社会的諸構造としての「経済」，“社会”，「政治」についてはどう描かれているだろうか。（階梯としての）諸成層の重なり合いとして描かれる（c）面の社会的構造において，「経済」は最下部に位置されているが，その中のモデルAでは「グローバルな資本家的経済」，モデルBでは「資本家的生産関係」と描かれている（前半の図-３-(1)）[19]。もちろんグローバルという意味では，マルクスの「プラン（「経済学の方法」『要綱』）」における「世界市場」までの進行を待たねばならず，さらに同じ「資本家的」であっても，その歴史的／地史的（時間的／空間的）な変化に照応させなければならないのだが，MMCと4PSBとの接点という意味ではここであろう。ただ，「経済」が“社会”に達した時／地点では，例えば「経済」以外の各社会諸構造についてはまだ，「混沌たる表象」のままであろう。しかし「経済」を行為者性の方から形成してきた（b）面の「社会的諸相互作用」や（d）面の「身体化された人格の成層」，また本来「経済」に基本的に対峙していた自然とそれとの交流である（a）面は臨めるだろう。そして（c）面でも，「経済」が形成してきて“社会”へと受け渡す過程についても臨めるだろう。そういう意味では，「経済」が上向の旅を終えた時／地点は，まだ十分に概念化はされていないとしても，それらを形成する基礎となる「多くの規定と関係」は眼前に広がっているだろう。ただ残念ながら，バスカーは「経済」と“社会”との関連性については何も語ってはいない。

“社会”については，順序はともかくモデルAでは「市民社会（広義の「社会」）」，「家族，女性の諸権利（狭義の社会sozial）」はすべて“社会”に入るだろうし，モデルBでは「間-／内-社会的，（グローバル化した）市民社会（広義の「社会」）」，「特殊的な家族形態（狭義の社会）」もすべて“社会”に含まれよう。（同図）ただし，他で述べるように“社会”の「構造」はこれらを含むが，“社会”は4PSBの（c）面以外の他面も含むという性格をもつことが重要である。

もう一つの「政治（国家）」についてはバスカーのモデルは少々複雑である。モデルAでは，グローバルな資本家的経済のすぐ上位（上部）に「国民国家」が来て，「市民社会」はさらにその上位（上部）に描かれている。モデルBではそれと異なり，「（おそらくグローバルな）資本家的生産関係」の次の上位（内部）には，「間-／内-社会的，政治的，経済的，軍事的秩序」が来る。ここでは世界的な「社会」「政治」の秩序形成が示されており，その次の上位（内部）に「（グローバル化した）市民社会」，そしてその上位（内部）に「個別的な国民国家」が来るのである（同図）。現代では「社会的諸構造」といっても，グローバルな関係性が大きな影響力を持つのは当然だろうが，その前提としてバスカーの言では「個別的な国民国家」の存在を見ておかねばならないだろう。しかしマルクスが「プラン」で語った「国家による社会の総括」という国家の位置は，バスカーの描くものからは伺えない。そして「政治（国家）」を考える場合，「経済」における生産関係を基礎とする「階級関係」およびそれと国家との関係をどう見

るかは欠かせない。ここに対応するものとしてバスカーの4PSBでの描き方は，「下位次元」における各平面の複合的な重なり合い（「ネクサス nexus」と名付けられる）である。すなわち（b）面，（c）面の下位次元に力（力$_1$と力$_2$），コミュニケーションと言説，道徳と規範の三つの水準を提示し，これらを「階級」や「国家」の権力構造と関わらせるが，「経済」の階級より広い概念として力$_2$（主人-奴隷関係として歴史的な各時代の階級関係より一般的な概念）が描かれ，（c）面の下位次元（力$_2$とつながる言説関係，規範的関係）の複合が政治的権力（国家あるいは法と政治）なのだが，国際的な制度化がグローバルな「新世界秩序」であるとされ上部構造のモデル図につながる。またそこに（b）面の下位次元（力$_2$，コミュニケーション，道徳）が複合化されれば「イデオロギー」となっている（前半の図-３-(2)）。しかしながら「国家」や「階級（力$_2$）」の基本的性格や本質について，あるいはそれらと「経済」さらに“社会”との関連性については，かなり今後検討すべき課題が残っていると言わねばならない。そして，グローバル化の中での「社会的諸構造」の見方についても，時間的／空間的な射程の変化における考察をせねばならず，他の機会に譲りたい[20]。

(3) “社会”における多くの規定と関係

最後の第三として，“社会”である「豊かな全体性」の内容としての「多くの規定と関係」とは4PSBからすればどのようなものとして推量できようか。まず，“社会”の基本的性格が，「関係性」であることは，前述したようにバスカーは「社会」を「関係主義」とし，「現象を引き起こす基底的な社会関係」を科学的に認識する「社会関係の学」を「社会学」としている。そしてこういった「社会」の捉え方は，マルクスが「様々な諸関係の総体」として「単なる人間の集団」ではないとする「社会」認識と合致するとしている。MMCで，例えば単なる「商品」も社会関係の表れだとされるように，4PSBも「関係主義」あるいは「社会関係」の視点から捉えられており，その視点が基軸に座っているならば，そういった「関係性」は“社会”の中心軸となるであろう。上記したように4PSBでは，（b）面における行為諸主体間の社会的諸相互作用（複雑に言えば，間-／内-主観および間-／内-人格の社会的諸相互作用）が，「人間的諸関係」から「社会的諸関係」となり，（c）面の社会的諸構造を生成し，逆に（c）面の社会的諸構造が（b）面の社会的諸相互作用を生成するという，（b）面と（c）面との相互作用もTMSA論に続く重要な関係性である。さらには4PSBの（a）面の自然との物質的交流も，（d）面である身体化された人格の成層も，複数の行為諸主体が有する「人間的実践」，すなわち転態を生起する志向的な行為者性との「関係性」として捉えられている。このようにマルクスが述べた「多くの規定と関係性」における，「関係性」の“社会”における踏まえるべき内容として，4PSBがまずは参考にできるだろう。

次に，では「規定」とは何とすべきなのか。これまでに出現した行為者性，そしてそれと相互に関係しあう四平面，そして（b）面と（c）両の下位次元などがまずは妥当しそうである。しかし，それぞれの「規定」はまだ単なる「抽象的普遍」のレヴェルであり，MMCのように下向／上向（分析／綜合）の結果得られた「規定」ではないから，具体的普遍としての概念には達していない。ただリトロディクションでいう「先行する軌範的言明」にはなるだろうから，“社会”概念における引照枠組にはなるであろうと思われる。もちろん既存の「社会学」には，断片的には規定に繋がる「用語」は多く存在することは言うまでもない。

最後に本稿では論じられなかったが，バスカー（とりわけ『弁証法 Dlc』）が多くのページを割いている「全体性」については，マルクスの「多くの規定と関係性からなる豊かな“全体性”」にかかわる概念なのであるが，今後の課題として残したい。

注

14） 四面的社会存在については，バスカー後年のいわゆる「スピリチュアル ターン spiritual turn」を経た「メタ リアリティ哲学 the philosophy of metaReality」においては，「n-次元的に一般化された社会空間」での「心 mind，情 emotion，超心的意識 supramental consciousness」という創発性のレヴェルで描かれるに至る。こういったバスカーの「転回 turn」とその内容については今後の大きな検討課題であるが，本稿では「３次元（あるいは４次元）レヴェルの社会空間（および時間）」におけるバスカーの視角に留まって，“社会”の考察を行っている（ECS，2016）。

15） このバスカーの関係論にかかわる定義に関して，本文では Marx, K. Grundrisse，Harmondworth，1973 からの引用であると示されている。

16） バスカーは，複合体が生成メカニズム／構造であればシステム system（体系），できごと（事象，経験的／現実的ドメインか）レヴェルであればネクサス nexus（式部の訳では「交差領域」，Dlc，1993（訳））としている。ネクサスの例としては，前章の「4PSB の下位次元」である力$_2$／言説／規範の複合体であるイデオロギーがそうである。（ただし，コリアーはバスカーと違って，イデオロギーを構造体の内部にある構造と捉えている）

17） inter-/intra- については，バスカーの Dlc，1993 でも ICC，2010A でも，間-／内-と訳されたり，相互-／内部-，あるいは対-／内-と訳されたりしている。とりわけ内（部）- intra- 作用については，バスカーは「弁証法的な関係性」として複雑な規定をしているが，本稿の２-(3)-③における内-主観性の説明を参照していただきたい。

18） リロトロダクション（遡及）retroduction とは，D（記述 description）R（遡及 retroduction）E（精査 elaboration）I（同定 identification）の方式で，一つの生成（因果）メカニズムを探究する手法だが，この方法は MMC の上向（分析，抽象化）／下向（綜合，具体化）と近似的であるという見解については木田（2016A）を参照してほしい。またリトロディクション（遡源）retrodiction とは，R（分解 resolution）R（再記述 redescription）R（遡源 retrodiction）E（絞込み elimination）の方式で，先行する生成（因果）メカニズムに関わる理論（軌範的言明）が応用可能かを探究する手法だが，複合的対象を扱うので原因も複合的となる。MMC においても，複合的対象を分解しながら，探究目的に絞込みつつ先行研究の理論を適用して説明するリトロディクションと，新たな理論を探索するリトロダクションの両方法が使われたという考え方を示した木田（2017）も参照してほしい。

19） バスカーの「社会」における「（階梯としての）諸成層」については，「上部構造の２つのモデル（前半の図-３-(1)）」のうち，モデル A ならば「上部構造化 supersutructuration」と呼ばれ，下層（既存層）の上部に上層（創発層）を重ね合わせる様式であり，モデル B ならば「内部構造化 intrasutructuration」と呼ばれ，外層（既存層）の内部に内層（創発層）を重ね合わせる様式である。さらに中間的な「内発的上部構造 intrinsic superstructure」の様式がある（Dlc，1993，p.50，p.162（訳，p.93，p.259））。「社会」における諸成層の様式については，他には前述した（大きい）成層を「構造体（＝最広義の社会）」とし，その中に（小さい）諸成層を「薄層（訳では積層 lamination）（＝「経済」「政治」「イデオロギー」）」と呼び，「水平的創発性」として配置するコリアーの案がある（Collier，1989，p.103）。またバスカーが後に提示した，複合的多重的に成層間（社会（構造）と人間（行為者性））で重なる「薄層」を，（最広義の）「社会」における（中義の）“社会”とする私案もある。いずれにしても「経済」―“社会”―「政治（国家）」の基礎的な形態や内容の「階梯としての成層」については，まだまだ種々の考察が必要であると同時に，地史的（空間的／時間的）展開によりグローバルな，より現代的な姿態へと転換させている様式を把握する課題もあるだろう。さらに，“社会”が，社会全体における「経済」／「政治」をなぜ内含するのかについては，「連字符（―）社会学」といわれる（例，「経済―社会学」／「政治―社会学」）ケースを想定しており，したがって「構造」としての「経済／政治」（4PSB では（c）面）だけではなく，「社会的諸相互作用」（同じく（b）面）の両者を，“社会”は内含していることを付言しておきたい。

20）（b）面／（c）面と「下位次元」との関連については，4PSBにおける「政治的生活過程」における「国家」や「精神的生活過程」である「文化」の描き方にかかわるのであるが，残る課題である。さらにはMMCの下向／上向（分析／綜合）との対応関係にもかかわる課題でもある。MMCでは，「経済」が下向（分析＝抽象化）され，遂には資本―貨幣―商品へと辿り着くが，4PSBの（c）面である「社会諸構造」の一つとしての「経済構造」を分析すると，一つは（b）面である人格間の（「経済的」）諸相互作用へと至り，他方では「下位次元」として，（b）面では，「経済的」な力$_2$，コミュニケーション，道徳，そして（c）面では，「経済的」な力$_2$，言説，規範およびそれらの「集合」へと至る。これらがさらにどう関連しあうのか／しあわないのか，についても残された課題であろう。

引用／参考文献

Archer, M.S. Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach, Cambridge University Press, 1995（佐藤春吉訳『実在論的社会理論―形態生成論的アプローチ―』青木書店，2007）

Bhaskar, R. The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences, Harvester Press, 1979, (2nd: Harvester-Wheatsheaf, 1989, 3rd : Routledge, 1998)（式部信訳『自然主義の可能性―現代社会科学批判―』晃洋書房，2006）/ 略称 **PN**

Bhaskar, R. Scientific Realism and Human Emancipation, Verso, 1986, (2nd: Routledge, 2008A) / 略称 **SR & HR**

Bhaskar, R. Dialectic: The Pulse of Freedom, Verso, 1993, (2nd: Routledge, 2008 B)（式部信訳『弁証法―自由の鼓動』作品社，2016）/ 略称 **Dlc**

Bhaskar, R. Reflections on MetaReality: Transcendence, Emancipation and Every Life, Sage Publication, 2002, (2nd: Routledge, 2012) / 略称 **RMR**

Bhaskar, R. & Danermark, B. Meta theory interdisciplinary and disability research: a critical realist perspective. Scandinavian Journal of Disability Research, 2006, 8(4)

Bhaskar, R. et.al. (eds.) Interdisciplinarity and Climate Change: Transforming Knowledge and Practice for our Global Future, Routledge, 2010A / 略称 **ICC**
(in this book)
Parker, J. Towards a dialectic of knowledge and care in the global system

Bhaskar, R. with Hartwig, M. The Formation of Critical Realism: A Personal Perspective, Routledge, 2010B / 略称 **FCR**

Bhaskar, R. with edited with a preface by Hartwig, M. Enlightened Common Sense: The Philosophy of Critical Realism, Routledge, 2016 / 略称 **ECS**

Bhaskar, R., Danermark, B. & Price, L. (eds.) Interdisciplinarity and Wellbeing: A Critical Realist General Theory of Interdisciplinarity, Routledge, 2018: kindle / 略称 **IWB**

Brown, G. The ontological turn in education, Journal of Critical Realism, 2009, 8(1)

Collier, A. Scientific Realism and Socialist Thought, Harvest Wheatsheaf Lynne Riener Pub. 1989

Marx, K. Grundrisse der Kritik der politischen Oekonomie, Dietz verlag, 1857-58（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店，第1分冊，1959）

Marx, K. Das Kapital ― Kritik der politischen Oekonomie, Dietz verlag, V.1: 1867, V.2, V.3 (Engels, F.): 1885, 1894（岡崎次郎他訳『資本論』大月書店，1巻，2・3巻（エンゲルス，F.）：1968）

Marx, K. Zur Kritik der politischen Oekonomie, Erstes Hett, Volksausgabe von Marx-Lenin-Institüt, 1934（武田隆夫他訳『経済学批判』岩波文庫，1956）

Price, L. Critical realist versus mainstream interdisciplinarity, Journal of Critical Realism, 2014, 13(1)

Price, L. & Lotz-Sisitka, H. (eds.) Critical Realism, Environmental Learning and Social-Ecological Change, Routledge, 2016

木田融男「“社会”と権力・支配―“社会”概念の基礎的検討を通して―」『社会科学論集』10号，大阪府立大学社会科学研究会，1979A

同 「“社会”概念をめぐって（上）（下）」『新しい社会学のために』19号／20号，現代社会研究会，1979B／1980
同 「現代日本における“社会”の性格」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第21巻，第２号，1985
同 「企業“社会”体制と生活価値」，木田融男・佐々木嬉代三編著『変貌する社会と文化』法律文化社，1990
同 「“社会”概念と日本社会」『特集：産業社会学部国際交流シンポジウム―産業社会の変容と市民社会の再生―』，立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第32巻，第４号，1997
同 「“社会”概念と共同性」，中久郎編『社会学論集―持続と変容』ナカニシヤ出版，1999
同 「“社会”概念と市民社会」立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第41巻，第１号，2005
同 「批判的実在論とリトロダクション―マルクス理論との関連で―」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2015A
同 「格差社会と階級理論―批判的実在論を通して―」櫻井純理他編著『労働社会の変容と格差・排除―平等と包摂をめざして―』ミネルヴァ書房，2015B
同 「批判的実在論とリトロダクション―社会科学方法論の比較から―」，立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第53巻，第４号，2016A
同 「批判的実在論とリトロダクション―覚え書き―」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2016B
同 「批判的実在論とリトロダクション／リトロディクション―複合決定の問題と関わらせて―」，立命館大学産業社会学会『立命館産業社会論集』第54巻，第１号，2017
同 「間―専門性（学際性）と薄層」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2018
見田石介『資本論の方法』弘文堂新社，1963

Critical Realism and “Society” Concept [2] :
On the Inter-Disciplinarity in Sociology

KIDA Akio [i]

Abstract : Unlike ‘society’ as it is envisaged in social science, “society” in sociology has been defined as a (middle ranged) concept in contraposition to ‘economy’ and ‘politics’. The first purpose of this report is to examine whether the reality of this “society” concept can be quoted from Bhaskar’s ‘four-planar social being (4PSB)’ of critical realism, and if it is possible, what specifically can be quoted. He developed 4PSB based on his ‘the transformational model of social activity (TMSA)’. With stratified agency of human beings used as a key against the background of relations with nature, standpoint of 4PSB on inter-/inner-subjective (personal) relations and on social relations/structures is to understand “society” with ‘concrete universal’ which was suggested by Bhaskar. This may be the reality of “society” (sociology). However, the standpoint illustrates duality of human beings (agency) and society (structure) as a basic assumption, and sociology, which studies the two stratifications, has a problem concerning how to be established as one specialized academic field. I understand Bhaskar’s concept of a ‘lamination’ as the society which has emergent compositeness between the stratification of human being and that of society. Therefore, I explain sociology as a lamination with emergent compositeness between human science and social science, based on the academic concept inter-disciplinarity. This suggestion will be the second theme to be discussed in this report.

Keywords : “society”concept, transformation, four-planar social being, agency, inter-/intra-subjective (personal) relations, lamination, inter-disciplinarity

i Professor Emeritus of Ritsumeikan University